

地方創生フォーラム

「宮古で暮らす、未来をつくる」

第一部 基調講演 「岩手県立大学からはじまる地方創生」

【講師】鈴木厚人（岩手県立大学長）

1 はじめに

岩手県立大学は、各市町村の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の総合ビジョン作成にあたり、宮古短期大学部長で地域政策研究センター長の植田先生を中心に「地方創生支援チーム」を立ち上げ、県内市町村との連携を深めて総合ビジョン作成の支援を行っています。本日は地方創生に関連して、「岩手県立大学からはじまる地方創生」というテーマで話をさせていただきます。

2 私の大学像

東北大学副学長時代に、大学とはなにかを考える機会があり、「大学とは人類の未来と社会の発展に貢献するという使命を果たすべく、市民、社会の中に大学が同じ目線で入り、人類・社会が抱える問題を共有し解決に向けて努力するところ」という結論に至りました。この中で「市民、社会の中に大学が同じ目線」という箇所が重要で、欧米の多くの国々と異なり、日本の大学はエリート養成機関の特色が強く

残っています。これでは大学の目線がずれていて、本来の役割が十分に果たせないのではないか、ここをどう改善するかを大きなポイントとして大学を運営するつもりでいます。

また、「信頼される大学」を目指したいと思います。これも東北大学時代のことですが、当時の文部省(現文科省)に予算要求に行く際に、ある先生が私に策を授けました。それは、「文部省はお金がないと言うけれど、銀行と同じでお金は持っている。誰にお金を貸したら十分な利益(教育・研究成果)を返してくれるか、そういう人を探しているのだ。だから、予算要求の時には、単に予算の事だけではなく、自分がどういう人物で、これまで何をやってきて、それで今、このような仕事をしていると説明し、それを文部省が評価してくれれば予算はつくのだ」と。これは信頼関係を築くことの重要性を指摘しているもので、予算のみならず、これまで様々な問題解決の場面で、身に刻まれました。これからの大学運営でも、「信頼される学生、教職員、大学」を築くことに力を入れます。

3 岩手県立大学の理念

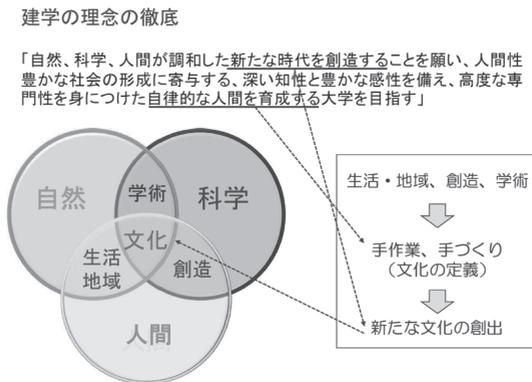


図1：岩手県立大学の理念【著者作成】

岩手県立大学の理念は、「『自然』、『科学』、『人間』が調和した新たな時代を創造することを願い、人間性豊かな社会の形成に寄与する、深い知性と豊かな感性を備え、高度な専門性を身につけた自律的な人間を育成する大学を目指す」とあります。

「『自然』、『科学』、『人間』が調和して新たな時代を創造する」とありますが具体的に何を創造するのだろうかと考えてみました。そこで、自然、科学、人間の3つの円がそれぞれに重なるように図示しました(図1)。自然と科学が重なる、すなわち調和する部分には学術が、科学と人間が調和する部分には創造が、そして自然と人間の調和から生活・地域が入るだろうと、少しずつ身近なものになってきました。最後に中心の3つの円が同時に重なる部分には何が当てはまるのか思いをめぐらしました。学術、創造、生活・地域に共通することとして、手作業をとおしての人間の営みがあり、文化が適していると結論しました。すなわち、建学の理念は、「自然、科学、人間の調和により、学術、創造、生活・地域の営みに切磋琢磨して、新たな岩手の文化を創造する」と理解しました。

文化というのは、単に芸術的なもののみではなく、手作り、手作業による人間の営みそのものであり、この建学の理念達成に向けて努力するつもりです。

4 地方創生に関わる文化

次に本学として、どのような岩手の新たな文化の創造を目指すべきかが課題です。そこで、今、さかんに叫ばれている「地方創生の時代」を検討してみました。ここで「今、なぜ地方創生の時代なのか」という疑問が沸きます。この疑問の答え見誤ると、的外れな地方創生の文

化に陥ります。その背景を明らかにすることによって、地方創生の文化が見えてくると思います。

調べてみると、1970年代～80年代は日本の高度成長期にあたり、地方が輝いた時代でありました。これは多くのプラスの結果を今日にもたらした一方で、負の遺産も作ってしまいました。“機能的だが特色のない近代化”、“生活様式の均質化”、“伝統的な共同性の喪失”、“生活の空虚感”。これらの負の遺産に、少子高齢化、地球環境の深刻化、大都市の一極集中が加わって、地域のアイデンティティーの復活、安全で安心な持続性の危機を取り戻そうと、今、地方創生が叫ばれているのではないのでしょうか。

そうすると何をすべきかについては、地域のアイデンティティーの主体は人間で、エネルギー源は協働に基づく共同性の再発見であると考えられます。キャッチフレーズを付ければ「現代版村社会の創出」となります。この「現代版村社会の創出」が地方創生の文化であると考えました。

しかし、次のことがよく言われています：日本は欧米に比べて市民が話し合いに参加する仕組みが極めて弱い、住民説明会で話を聞くというレベルのものではない、行政は住民の声にもっと耳を傾け各領域の特性を尊重すべきだ、世界の都市はハード面では高い水準でほぼ肩を並べるようになったが、違いを生むのは文化水準といったソフト面だと。まさに現代版村社会の創出は、この課題を克服しなければなりません。

本学は、地方創生支援チームの取組みや復興のためのプロジェクト研究、地域政策研究センターの地域協働研究、いわてGINGA-NET等による学生ボランティア活動など、地域貢献に対する様々な取組みや

研究を行っています。これらをどのような方針の下で方向付けをおこない、本学としての地方創生に結び付けるか、その舵取り役が現代版村社会の創出と考えています。

さらに、地方創生に関する成果の情報発信を強化するつもりです。具体的には、評価データや大学情報の一括管理・分析、研究マップ、教育マップ、シーズ集、年次報告書等を作成することで、様々な形の情報発信を企画することです。

これは大学のブランド確立に無くてはならないもので、このブランドを活用することによって研究が注目され、優秀な学生や研究者が集まる。そして、産官からの研究資金の拡大が図られ、また新たな次の研究が生まれ、成果が出てくる。このような本学のブランドのスパイラル上昇を実現することによって、地方創生の文化の創造を目指したいと思っています。

5 ILCに関わる文化

新たな文化の創出のもう一つは、国際リニアコライダー（ILC）にかかわる文化です。2～3年後にILCの日本誘致に対する政府決定がされます。それによって岩手県がどの様になっていくのか、岩手の地方創生の文化に関連させて考えてみようと思います。

ILCは、地下に第1期では30km位、第2期50km～70kmの直線のトンネルを掘り、電子と陽電子を加速して高エネルギー状態にして衝突させる加速器のことです。電子と陽電子の衝突により、ビッグバン直後の世界を作り、そこで起こる物質現象を測定し研究します。

ILC加速器は多くの最先端技術の固まりです。日本は30年前に世界で初めて超伝導電子・陽電子衝突加速器を作り、世界をリードしてき

ました。この実績とILC技術開発の国際拠点の成果が認められて、世界の研究者の間で、ILC日本建設の合意がされました。

今、世界最高エネルギーの加速器は、ジュネーブ近郊のセルンという研究所（欧州合同素粒子研究所）にあるものです。セルンには、日本を含めて、6000人以上の研究者が参加して、数年前にヒッグス粒子を発見し、ノーベル賞が与えられました。このセルンが今60周年を迎え、さらにこれからも研究を続け、まだ40年以上は稼働するだろうと思われまます。セルンの加速器は陽子・陽子衝突型ですが、これと研究面で相補的で、同時運転が期待されるILCも60年で終わる事はまずありません。次に予定されているSuper-ILCまで進めると、100年は続くでしょう。日本が100年にわたり、世界の最先端科学の国際研究拠点になるというのが、ILC計画です。

ILCが目指す研究は、物質の本質と宇宙の起源の解明です。物質の素とは何か、古代ギリシャ時代からこの謎への挑戦が始まりました。当時は、土、火、空気、水の4つの要素が物質の素と考えられていました。では、現在はどうでしょう。水はみなさんご存知のように、 H_2O と記述されて水素原子2個と酸素原子1個からなる水分子が沢山集まったものです。原子は中心に原子核があり、その周りを電子が回っています。原子核は陽子と中性子から構成され、さらに陽子や中性子はクォークという粒子からできています。現時点では、身の回りの物質はクォークと電子の素粒子からできていると考えられています。さらに宇宙に目を向けると、この宇宙は6種類のクォークと3種類のニュートリノ、電子、ミュー粒子、タウ粒子の合計12個の素粒子から構成されていると考えるに至りました。

ILCが目指す素粒子の研究は、物質の根源である素粒子の探求に加

えて、これらの物質が実在する宇宙のゆりかごから墓場まで、すなわち宇宙の誕生と進化、終焉の謎の究明を行うものです。私たち人間が生存する今の宇宙は、ビッグバンから137億年後の宇宙です。宇宙は誕生後、膨張を続けてきました。ということは、昔に遡ると宇宙は今よりもっと小さかったはずです。そして、この小さな領域に銀河や星がぎゅうぎゅうにひしめき合い、高温の状態であったと予想されます。生物が出現するずっと前の星団や銀河などが形成される前の宇宙は、星で満ちていました。太陽の8倍以上も重い星は燃え尽きて最後に超新星爆発を起こして一生を終えます。この時に、星の中で生成された炭素や酸素・・・鉄や、超新星爆発の際に作られた銀、金・・・鉛等々の元素が宇宙空間にバラまかれて、人間を含む生命体ができたと考えられています。もっと宇宙の始まりへと時間を戻すと、ますます温度が上昇し星も分解した状態、すなわち宇宙は水素やヘリウム等の原子で充満されていました。原子の世界です。このように、宇宙が小さくなり温度が上昇するにつれて、物質は分解されてより小さな物質で満たされます。そして、ビッグバン直後に至ると、物質の素である素粒子の充満した宇宙、素粒子の世界に辿り着きます。ILCはビッグバン前後の宇宙の探索に挑み、素粒子顕微鏡であると同時に、宇宙望遠鏡でもあります。

ILC候補地の調査は、2000年頃から始まりました。土木学会、岩盤力学学会等の先生方の応援で、2010年に12の候補地から北上と九州の脊振の2地区に候補地を絞りこみ、平成25年8月17日にILC立地評価会議は最終候補地として北上サイトを最適と評価しました。

これに伴い、岩手県では準備万端への取り組みを開始しなくてはなりません。一つは、世界から物資、研究者、家族が集まる町の形成、

都市計画のビジョンづくりです。この時に、岩手県の衣食住の資源を最大限に活用することが大切です。

これは単に国際都市を作るという事業ではなく、各国の地区の集合体を作るようなイメージがふさわしいです。世界中の研究所や国が東北地区に、自らの出先機関を作り、それらをまとめて連合体を形成します。自分の国の機関があるのですから、電気代も人件費も必要経費は分担します。

居住区に対するもう一つの課題は、研究者や家族用の居住区を一か所にまとめないことです。特別の居住区を作ると、周辺に住んでいる人たちとの接触がなくなり、旧住民・新住民という言葉ができてしまいます。この区別ができた例が、つくば学園都市です。

これを防ぐには、居住生活地区の分散に加えて、地域住民の中に外国人が仲間として入るような仕組みが必須です。広域分散機能を生かすべきです。欧米人は日本人と違って50キロ離れていても近い、100キロでまあまあの感覚です。10キロ超えると遠いと言う私たちと大違いです。50、100キロは通勤圏だと思っていますから広域分散でも問題は生じません。

ILCにおける長期間の加速器技術、粒子計測技術、大量データ集積・解析技術、安全管理・保守技術等の開発に伴い、技術イノベーションの創出・促進に大いに期待がかかります。加速器技術を取ってみても、輸送からエネルギー、情報通信、環境、建設、材料、医療等々の多くの分野の最先端の技術と関連を持っています。

もう一つの技術革新としてグリーンILCがあります。ILCで放出される熱を少しでも回収し、蓄えて再利用する試みです。最終的には風車等の自然エネルギーでILCを運転することが夢です。

6 まとめ

岩手県立大学の理念として文化の創出とありますが、一つは地方創生に関わる文化で、現代版村社会の創出を目指します。

もう一つはILCに関わる文化です。これに関しては地域からの開国を掲げ、様々な国が物資、人材、経費を持ち寄り新しい国をつくるという観点から、国際科学圏や国際居住圏、産業イノベーション圏、エネルギー持続可能圏を作ろうと考えています。

県立大学の進むべき方向について、私なりにこの9カ月間おさらいしたことを今日ここで皆さんに紹介しました。皆さんからのご意見、ご批判を参考にして、軌道修正しながら取組んでいくつもりです。ご清聴ありがとうございました。